

## ローラ・インガルス・ワイルダーと 進歩主義教育運動

高野 弘子

### 1. はじめに

革新主義時代 (Progressive Era, 1890-1920) は、20世紀初頭のアメリカ合衆国に現れた革新主義運動 (Progressive Movement) が高まった時代である。革新主義時代の数十年間は、アメリカが急速に工業化したことで、大企業の出現や都市人口の急増等の現象が生じ、かつての農業中心、農村中心、個人中心の社会から、工業中心、都市中心、組織中心の社会へと著しい変化を遂げた。また、単一の革新主義運動というものはなく、様々な階層が、様々な政治の場で、様々な意図を持って推進した改革主義運動の総称であり、各階層はそれぞれの立場から異なる関心を持って改革に参加した (有賀 187, 194-95)。

「小さな家」シリーズ (1932-1943) の作者であるローラ・インガルス・ワイルダー (Laura Ingalls Wilder, 1867-1957) は、この革新主義時代、30歳代から50歳代という働き盛りの年齢を迎えていた。夫アルマンゾ・ワイルダー (Almanzo Wilder, 1857-1949) と共に、農場を営む傍ら、農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』 (*Missouri Ruralist*) の記者として記事を書き、1919年からは家庭部門のコラムを連載するようになった。当時の農業新聞は、革新主義運動家の考えを広める広報の役割を担っていた。ワイルダーはこの他にも、農民のために組織されたマンズフィールド農場融資協会 (Mansfield Farm Loan Association) の秘書兼会計係 (secretary-treasurer) として、近隣の農民たちが安い利率で資金が得られるように尽力した。また、女性クラブであるアセニアンクラブ (Athenian Club) やジャスタミアクラブ (Justamere Club) を創設し、クラブ女性たちと共に、巡回図書館や休憩室を地域に設立した。これらの活動は、革新主義運動の中の農村生活運動 (Country Life Movement) 及び女性クラブ運動 (Woman's Club Movement) の一環であった。革新主義運動において、多くのジャーナリストがリーダーの役割を担っていたとされているが、ワイルダーもその中の1人であったと考えられる。

ワイルダーは『ミズーリ・ルーラリスト』に、農村生活運動に関する内容や女性クラブ運動に関する内容の他に、教育に関する記事も書いている。教育に関わる記事の中でワイルダーは、子どもの早期教育が、子どもの人生に驚くべき影響を与えること、子どもの人格を形成することは、明日の男女を、さらに、国、世界を形成することにつながっていることを示し、家庭教育及び早期教育の重要性を指摘している (Hines 63-64)。また、経験こそが最良の教師であり、私たちの人格を思考と経験とで開拓していくべきだと訴えており (Hines 213)、この表現は、進歩主義教育者であり、経験を重要視するジョン・デューイ (John Dewey, 1859-1952) の考え方を彷彿させる。また、ワイルダーは、1915年、サ

ンフランシスコ (San Francisco) でジャーナリストとして活躍する娘のローズ・ワイルダー・レイン (Rose Wilder Lane, 1886-1968) を訪問した際に、当時開催されていたパナマ・太平洋万国博覧会 (Panama-Pacific International Exposition) を見学し、マリア・モンテッソーリ (Maria Montessori, 1870-1952) の授業を直接見た経験をもっている。これらのことから、ワイルダーは農村生活運動及び女性クラブ運動と共に、進歩主義教育運動 (Progressive Education Movement) からも影響も受けていたことが推測される。

ウィリアム・アンダーソン (William Anderson)、ジョン・E・ミラー (John E. Miller)、アン・ロミネス (Anne Romines)、キャロライン・フレイザー (Caroline Fraser) 及び筆者により、ワイルダーが、革新主義運動のうち、農村生活運動及び女性クラブ運動に関わっていたことがすでに先行研究されている。しかし、ワイルダーと進歩主義教育運動との関わりについて言及する先行研究はない。そこで、本小論は、ワイルダーと進歩主義教育運動との関連を、彼女の書いた『ミズーリ・ルーラリスト』の記事、当時の時代背景、彼女の作品を分析することを通して探っていきたい。なお、ここで分析するワイルダーの『ミズーリ・ルーラリスト』の記事は、ミズーリ州立大学コロンビア校 (University of Missouri, Columbia) のエリス図書館 (Ellis Library) に保管されているものを2007年にステイブン・W・ハインズ (Stephen W. Hines) が忠実に転記し書籍として出版した『ローラ・インガルス・ワイルダー：農場ジャーナリスト』 (*Laura Ingalls Wilder: Farm Journalist*) を用いる。

## 2. 革新主義時代における進歩主義教育の開花

農村生活運動家たちは、農業を効率化させ、農村生活の質を向上させるためには、農村教育が不可欠であると考え、彼らの意見を反映する農業新聞は、農村教育を支援する記事や社説を書いた。『ウォレス・ファーマー』 (*Wallaces Farmer*) の発行者であり編集長でもあったヘンリー・ウォレス (Henry Wallaces, 1836-1916) は、農場の少年たちが理解すべき多くの価値ある事実と共に、農場生活への愛を、公立学校で教え込むべきだと主張した。ウォレスは、セオドア・ローズベルト大統領 (Theodore Roosevelt, 1858-1919) により設置された農村生活委員会 (Commission on Country Life) の7人の委員の1人でもあった。『ルーラリスト』も発行初年度から、農村の学校における農村教育を推奨し (Fry 120)、農業新聞各紙は、農村教育に関する成功例を掲載すると共に、子どもたちが農作物や家畜の育成に関わるコンテストやフェアを催す支援をした。

一方、ワイルダーの上司で『ミズーリ・ルーラリスト』の編集長であるジョン・F・ケース (John F. Case) は、ミズーリ州ポーター (Porter) にある学校で、マリー・ターナー・ハーベイ (Marie Turner Harvey, 1869-1952) が農業と家政の授業を発展させたことを記事で取り上げている。デューイの娘のイブリン・デューイ (Evelyn Dewey, 1889-1965) が、このハーベイの学校について本を書いたことにより、彼女の学校は全米の注目を集めた (Fry 122)。イブリン・デューイは、バーナード大学 (Barnard College) 卒業後、同級生であったマーガレット・ナウムブルグ (Margaret Naumburg, 1890-1983) がローマで開かれた第1回モンテッソーリ教員養成コースに参加したことから影響を受け、母

親のアリス・チップマン・デューイ（Alice Chipman Dewey, 1858-1927）と共にローマにあるモンテッソーリの学校を訪問し、直接面会している（Staring 22）。

前にも述べたように、1915年にサンフランシスコに住む娘のローズを訪問したワイルダーは、同時期に開催されていたパナマ・太平洋万国博覧会を訪れ、モンテッソーリの授業を間近で見る機会に恵まれた。滞在中及び帰宅後、ワイルダーは、『ミズーリ・ルーラリスト』に数回に渡って、パナマ・太平洋万国博覧会の見聞録を記事として掲載した。その中の、同年12月5日の記事で、モンテッソーリの授業について以下のように触れている。

教育方法への関心の増加や、ここ数年で急速に発達したチャイルド・トレーニングの仕組みが、教育パビリオンを博覧会の最も人気のある建物の1つにした。このパビリオンでは、学業や教育方法、及び、ニューヨーク州からフィリピン、中国、日本に至るまでの子どもたちの手工芸品が陳列されている。また、イタリアからモンテッソーリが訪れし、このパビリオンの中で、小さな子どもたちのための授業を行った。（Hines 45）

モンテッソーリは、活動できる環境を整えれば、子どもたちは自ら教育する力をもっているという教育法を唱えた（Clifford 10）。1910年に出版された『モンテッソーリ教育法』（*The Montessori Method*）は、20の言語に翻訳され、アメリカにおいてもベストセラーとなった（Clifford 11）。1911年にモンテッソーリの教育法による最初の学校がニューヨーク州で開学され、以来1913年までに、この教育法による学校は、アメリカ国内で100を数えるようになった（Clifford 12）。ワイルダーが記事で述べている通り、モンテッソーリは、パナマ・太平洋万国博覧会で、見学することのできるガラスでできた壁のある教室で、4か月間、21名の幼児を教えている（Clifford 14）。

モンテッソーリは、ルソー（Jean J. Rousseau, 1712-1778）、ペスタロッチ（Johann H. Pestalozzi, 1746-1837）、フレーベル（Friedrich W. Frobel, 1782-1852）らの系譜にあり、20世紀に入り、エレン・ケイ（Ellen Karolina Sofia Key, 1849-1926）やデューイらと共に、児童中心主義の教育思潮を復興する新教育運動を担った教育思想家であり、教育実践家である（田中 21, 乙訓 41）。新教育運動について保田恵莉は、「19世紀末から20世紀初頭にかけて、欧米では新教育運動と呼ばれる教育改革の運動が爆発した。ドイツでは改革教育学・アメリカでは進歩主義教育と呼ばれ、いずれも子どもの自由・自発性・自己活動・経験等に教育的意義を与える運動であった」（50-54）と説明している。イタリアの教育家モンテッソーリは、家庭教育の重要性を説き、また、スウェーデンの教育家ケイは、母性主義を唱え、母親の役割の重要性を訴えた。アメリカにおいては、デューイが学校改革を進めたが、これは、家庭教育が十分に機能しないことを学校教育で補うことを狙ったものであり、彼も家庭教育の重要性を強く認識していた。

娘と妻がイタリアのモンテッソーリの学校を訪問したことの他に、デューイ自身もモンテッソーリと親交をもっていた。乙訓稔によれば、パナマ・太平洋万国博覧会が開かれる2年前の1913年、モンテッソーリは熱狂的な歓迎を受けて訪米している。その際、カーネギーホール（Carnegie Hall）において千人規模の聴衆の前で講演を行ったのだが、その

司会進行を引き受けたのがデューイであった。デューイは『学校と社会』（*The School and Society*, 1915）の中で以下のように述べている。

子どもにとって何が最善であるかを認識でき、必要とするものを提供することのできる両親のいる理想的な家庭では、子どもは、社会的な親しい交わりや社会的規約を学ぶことができる。子どもは、家族との興味や価値のある会話の中で発言したり、質問したり、話題について議論したりすることで継続的に学ぶ。子どもは経験を話したり、間違いを直したりする。家業に参加し、作業をする習慣を身につけ、秩序や他人の権利や考えを尊敬し、生活の基本的な習慣を身につける。家事への参加が知識を身につける機会となる。理想的な家は、建設的な直観を働かせることのできる作業場であり、探究に取り組む小さな実験場である。子どもの生活は、家の外の庭、畑、森へと広がり、歩いたり話したりすることで、眼前にあるより広い世界へと踏み出す。  
(35-36)

これに続けて、学校は理想の家庭が拡大されたものでなければならないとしている（36-37）。デューイの言葉から明らかな通り、進歩主義教育の根幹には家庭教育があった。ドイツでは改革教育学と呼ばれ、アメリカでは進歩主義教育と呼ばれたことで、呼び名に違いはあれ、モンテッソーリ、ケイ、デューイは、家庭教育に教育の根幹があるという共通の認識をもって新教育運動を推進した。

### 3. ワイルダーの教育に関する『ミズーリ・ルーラリスト』の記事の内容

『ミズーリ・ルーラリスト』の編集長であるケースは、進歩主義教育に関わる記事を書いているが、ワイルダーの『ミズーリ・ルーラリスト』の記事の中にも、進歩主義教育者たちの唱える家庭教育や母性に関するものが複数見られる。ワイルダーが家庭教育や母性について、どのような内容の記事を書き、その背景には何があったのか。

#### (1) ワイルダーの家庭教育に関わる記事とその時代背景

##### ① 家庭教育と利己主義

1916年12月5日の記事でワイルダーは、「お金はすべての悪の根源である」ということわざを取り上げ、悪の根源はお金ではなく、利己主義であるとしている。そして、アメリカ人がお金で買えるものに対する利己的な喜びに傾倒し、それが子どもたちの行動にも影響を与えていることの例を2つ取り上げている。1つ目の例は、ワイルダーが数人の子どものいる家庭を訪ねた際に経験した出来事である。その家の父親が大切な覚え書帳が見当たらなかったため、子どもたちに見かけなかったかと尋ねると、だれも見ていないとの答えだった。そこで父親は、昼に戻ってくるから、それまでに見つけておいてくれると嬉しいと子どもたちに告げた。すると、子どもの1人が25セントをくれたら探すと言うので、父

親が、見つかったら25セントを渡すと告げると、子どもたちは皆熱心に探し始めた。その様子を目にしたワイルダーは、愛する人への奉仕が自由に与えられるべき家で、お金という利己的な喜びに関心が寄せられていることに対して残念に思ったことが示されている。2つ目の例は、鍛冶屋での出来事を紹介している。夏の暑い日、鍛冶屋が熱い鉄を扱って汗だくになっている時、2人の男の子たちがぶらぶらやって来て、飲料用の手桶の水が空だったので、父親に水は無いのかと尋ねた。父親は、手桶の中に水が入っていなければ、水が無いことを告げると、一緒に働いていた男性が、手桶に水を汲んできてくれないかと頼む。すると、少年たちは、10セントくれたら汲みに行くと言った。その男性は、水を飲むのにお金を払わなければならないのかと言うと、子どもたちはその場を去ってしまったという出来事である。ワイルダーはこれら2つの出来事を利己主義の例としてあげ、協力、助力、公平は世界で必要とされているが、もし、家庭でそれらを子どもの時に学ばなかったら、大人になってから役に立つ知識としてもつことは難しいとして、子どもたちが正しいスタートを切れるかは、家庭教育によるところが大きいと記事をまとめている（Hines 92-94）。

この記事が書かれたのとほぼ同時期である1910年に、チャールズ・A・エルウッド（Charles A. Ellwood, 1873-1946）は、『社会学と現代の社会問題』（*Sociology and Modern Social Problems*）という本を出版し、家族について言及している。「家族は人間社会における利他主義の主な、あるいはほとんど唯一の発生源」であり、「子どもたちは家族の中で、愛すること、従うこと、奉仕すること、そしてお互いの権利を尊重することを学ぶ」と述べている（55）。そして、「もし家族がその構成員に奉仕と自己犠牲の精神を教えることができなければ、彼らが社会からその精神を得ることはできないだろう」と続け、「人類の兄弟愛という理想は、家族の愛情がその意味を与えてくれないと意味がない」と述べている（56）。エルウッドは、ワイルダーの暮らすミズーリ州のランドグラント大学（land-grant university）であるミズーリ州立大学の社会学の教授であった。ミズーリ州の農村生活運動の拠点であるミズーリ州立大学は、州内の各地を農業指導に訪れたり、各地に委員会を設置したりしていた。ワイルダーの居住する郡の委員会の委員長には、彼女の友人であるJ・W・ブレントリンガー（J. W. Brentlinger）が任命されている。ブレントリンガーは、ワイルダーが秘書兼会計係を務めたマンスフィールド農場融資協会の会長でもあった。また、ワイルダーは、女性クラブであるアセニアンクラブやジャスタミアクラブを、ミズーリ州立大学の読書コースからの援助を受けながら創設している。これらのことが示すように、ワイルダーは、農村生活運動及び女性クラブ運動の活動において、ミズーリ州立大学から様々な援助を受けていた。したがって、同大学の社会学の教授であるエルウッドとワイルダーは、同時代の同地域の実状に近い視点から眺めていたと考えられる。彼女の子ども時代とは明らかに異なり、自ら進んで父親がなくなったものを探そうとしたり、飲み水を汲みに行ったりはしないで、お金と引き換えなら手伝うという子どもたちの利己主義的風潮に危機感を抱いたワイルダーは、新聞記事で家庭教育の重要性を訴え、また、エルウッドは、利己主義と対をなす利他主義を学ぶことができるはずの家庭が機能していないことに対する懸念を、彼の著書で示したと考えられる。

## ② 家庭教育と少年少女

1922年5月1日の記事でワイルダーは、少年犯罪に関わる記事を書いている。ワイルダーの隣人の庭に、この春、数人の小さな少年たちが入り、そこに巣を作っていた野鳥を、Y字型の棒にゴムひもをつけて小石を飛ばす道具で殺してしまった。ワイルダーは、数日前に読んだ日刊紙の19歳の少年の犯した複数の殺人の記事を取り上げ、これら2つの犯罪の間につながりを感じる。どちらも、程度は異なるが、法律を破っていることと、残酷に命を奪うという点で同じ種類の犯罪である。「子どもを進むべき方向に訓練すれば、年齢を重ねても、その方向から離れない」という聖書の言葉があるが、その反対も真実である (Hines 269)。つまり、もし子どもが、進むべきでない方向へ歩みを始めてしまうと、年を重ねても、その道に沿って進んでしまい、正しい道への軌道修正は難しい。子どもたちが最初に接する法律は両親の指示である。両親の指示は、できるだけ賢明で、可能な限り少なくするべきであるけれども、一度与えられたら、子どもたちに従わせるか、もし従わない場合は罰をもたらすことを示すべきである。そうすれば、子どもたちは善良な市民となるための法律を破ることは、苦しみをもたらすという教訓を学ぶ。子どもたちが自分のおもちゃを手にとって片づけることを指示するというような小さな行いでさえ、彼らに秩序、宇宙の法則、有用性、愛を教えることになる。正しい方向に子どもの歩みを進めさせる責任は両親にある。小さな足は、家から人生の旅を歩き始めるのであるから、その責任を学校や州に委任することはできないと記事をまとめている (Hines 269)。

当時の状況について、著名なジャーナリストであったジェイコブ・リース (Jacob Riis, 1849-1914) が、都市部で頻発する犯罪の少なくとも8割が、家庭生活の味を全く知らないような人々によって犯されており、罪と都市部の家庭生活の欠如を関連付けている (竹田 39)。また、前述のエルウッドは、州の刑務所の数が、1880年に30,659か所であったのが、1890年には45,233か所に増加し、1904年には、60,553か所にまで増えたことが示すように、明らかに、アメリカ合衆国の重犯罪は急激に増加したとしている (Ellwood 277)。そして、「家庭生活に関連する状況は犯罪に大きな影響を与える」と述べている (279)。その理由としてエルウッドは、「家庭生活は、個人を社会化するための学校」であり、「子どもが家庭生活の中で、法律とは何かを学び、市民と国家の関係について適切な理想を得ることができなければ、後に社会の無法者の仲間入りをする可能性が高くなる」と説明している (56-57)。これは、子どもたちが最初に接する法律は両親の指示であるから、それが一度与えられたら、子どもたちに従わせるか、もし従わない場合は罰をもたらすことを示すべきであり、そうすれば、子どもたちは善良な市民となるための法律を破ることは、苦しみをもたらすという教訓を学ぶというワイルダーの考え方と一致する。エルウッド、リース及びワイルダーは、犯罪の増加の根底に、当時の家庭教育のあり方が影響しているという共通の認識をもち、それを人々に指摘し、警告したと考えられる。

アメリカの歴史学者であるスティーブン・ミンツ (Steven Mintz) は、20世紀初頭までのアメリカの中流家庭において、教育、健康管理、高齢者や貧困者及び心の病気をもつ人々に対する家族の役割は、家庭外の専門家や機関へとだんだん引き継がれていったとしている (107-08)。また、母性主義を主張するスウェーデンの思想家であるケイは、代表

作である『児童の世紀』（*The Century of the Child*, 1909）の中で、「家はもう一度子どもたちの身体のみならず精神の拠り所とならなければならない。そのような家を形成するためには、子どもたちを家庭にかえさねばならない。子どもたちの人生の最良の部分、学校はより少なく、家庭がより多く担わなければならない」と続けている（164）。ワイルダーが、記事の中で、子どもの教育に関して、小さな足は、家から人生の旅を歩き始めるのであるから、その責任を学校や州に委任することはできないとしたのは、ミンツやケイが示すように、家庭の役割が家庭外に委託されつつあった当時の社会情勢を反映し、もう一度家庭の役割を見直すことを訴えたと考えられる。

1923年8月1日の記事で、ワイルダーは父母の教えについて書いている。牧草地で野生のヒマワリを摘み、その中心をのぞき込むと、ホームシックの波がワイルダーを襲い、泣きそうになった。優しい母の声、父のきらきらとした青い目、一緒に牧草地でデージーや野生のヒマワリを摘んで遊んだ姉を思い出した。ワイルダーの人生において、子ども時代の教えが彼女に影響を与え、彼女が従おうとしたのは父母が示した模範であった。時に反発することもあったが、常に、結局のところは、その教えと模範に戻ってきていることに気づく。父母の教えや模範は、羅針盤の針のようである。去年、アメリカで非常に多くの子どもの自殺があったという記事を読んだ。アメリカで、そのようなことを今まで聞いたことがなかったので、自殺した子どもたちの家に何か問題があったのではないかと思う。私たちは、今日の急速な変化の中にあっても、家の重要性を忘れてはならない。良心の強さは、現代の進歩や娯楽から生まれるのではなく、古い家の静かなひと時や団欒から生まれる。この初期の家の影響にとって代わるものはなく、すべての父親と母親から子どもたちへの遺産であると説いている（Hines 290-91）。

ワイルダーが記事を書いたのと同じ時代に、社会福祉や地域社会の構築に関する慈善事業に携わり、それに関わる本を書いたマーガレット・F・バイントン（Margaret F. Byington, 1877-1952）は、1918年に「普通の家族」（“The Normal Family”）という論文を書いているが、その中で「家庭は、人生における多くの重要な訓練を提供している」と述べ、家が最も重要な機関であるとしている（22）。そして、家庭生活において子どもたちは、学校のような正式な指導ではなく、模倣によって学ぶのであるから、家庭生活は、子どもたちが賢明さを模倣できるものであることが不可欠であるとし（22）、両親の教えや模範が、実践的な教育的価値を持つことを示した。この考え方は、子どもたちの人生という航海において、両親の教えや模範が羅針盤の針の役割を担うというワイルダーの考え方と一致している。そして、ワイルダーの記事の中の、良心の強さは、現代の進歩や娯楽から生まれるのではなく、古い家の静かなひと時や団欒から生まれるという表現は、ケイが「人間の最も強く建設的な要因は、静かで安定した秩序を持つ家の平和と義務である」と述べていること（162）、及びモンテッソーリが、静けさを通常の状態よりも高い段階としてとらえ、自身の教育法において、静けさを人格形成の重要な要素として位置付けたことと重なる（*The Discovery of the Child* 135, 139）。

## (2) ワイルダーの母性主義に関わる記事とその時代背景

1921年9月15日の記事でワイルダーは、世界で最も普遍的な感情は、母親の愛情であり、動物界から人間界まで、母親の愛は、最も強い創造の力であり、生命の保存者であり、進化の安全装置であるとしている。どの時代であれ、どこの国であっても、母親の愛は同じであり、果てしなくすべてを包むこむ愛であり、必要とあれば子どものために自らを犠牲にする愛であるとし、「ゆりかごを揺らす手は、世界を統治する手である」とまとめている (Hines 261)。

1923年5月15日の記事では、「日々些細なことがいっぱい、私はとても疲れています」という友人の最近発した嘆きの言葉で書き始めている。それを聞いて以来、ワイルダーは小さなことについて考えるようになるのだが、小さなことに対する私たちの判断はしばしば間違っているのではないかと思うようになる。庭で働くこと、鶏・子牛・子羊を世話すること、牛の搾乳、そして、農場の他のすべての雑用は、それ自体は小さく見えるかもしれないが、その結果は、実は「世界を養う」のに大いに役立っている。子どもたちのために、傷ついた場所にキスしたり、就寝時の歌を歌ったりすること自体は小さなことだが、これらは、一生続く家と家族への愛を教え込み、アメリカを故郷とすることを助ける。お弁当の昼食を用意したり、家族のためにおいしい食事を作ったりすることは、講義をしたり、本を書いたり、より多くの聴衆がいる他のことをすることに比べて、取るに足らない仕事に思えるかもしれないが、究極のところ、両者は同じくらい重要である。少年少女が強くて美しく成長するように、健康的な食べ物で十分に栄養を与え、家族が長生きすることは、決して小さなことではない。母親の行う日常の仕事を小さいことだと考えるのは、自分を軽蔑することを招いてしまい、また、そう考え続けるならば、そのことが視野を狭め、日々の仕事を苦痛にしてしまう。本当に素晴らしい小さなことが沢山ある。日々の小さな仕事は、世界の他のことと同等であるという事実は、私たちに尊厳と落ち着きを与える。自宅での女性の仕事は、布地を通り抜ける小さな金の糸が衣服全体を明るくすると同じように、文明という布地を通り抜けて明るくする太陽の光のようであるとまとめている (Hines 288-89)。

ミンツによれば、革新主義時代、高等教育を追求し、組織に参加し、家の外で働く女性が増え、家の世話や子どもたちの世話など、伝統的な役割を受け入れることに満足する若い女性が少なくなった (108)。19世紀後半の有給労働力への女性の参加が、1880年から1900年の間に倍増し、1900年から1919年の間に更に50%増加し、アメリカの歴史上初めて、労働力の全女性の4分の1以上が既婚者となるなど、家庭外での女性の活動が拡張した (111)。1920年までには、離婚、少子化、新しい女性の台頭、モラル革命により、家族の役割、子育ての方法、配偶者間の関係、家族と社会との関係は目に見えて変化した (112-23)。例えば、1870年から1920年までの半世紀の間に、全国的に認められた離婚の数は、15倍に増加し、1924年までには7人に1人の結婚が離婚に終わっていた。離婚率が上昇すると同時に少子化が進み、1800年に白人女性から生まれた子どもの平均数は7人以上であったのが、1900年までに3.56人となり、その後も出生率はさらに減少した。このような変化を、当時の多くのアメリカ人は、家族の崩壊の兆候であると恐れていた (112-13)。この



ため、1890年から1930年にかけて、進歩主義教育者、精神科医、ソーシャルワーカー、社会学者、議員たちが、家族が現状に対応するのを助けることを目的とした様々な改革を開始した（119）。革新主義時代の改革者たちは、家族の問題は根本的な社会問題を反映していると考え、家族を安定させるために社会的立法と教育を利用しようとした（125-26）。1909年にセオドア・ローズベルト大統領が招集した児童福祉に関するホワイトハウス会議（White House Conference on Child Welfare）で、州政府と地方自治体は、自宅で子どもの世話をする余裕ができるように、困窮しているシングルマザーに財政援助を提供すべきであるという立場をとった（Mintz 125, DuBois 469）。その結果、革新主義時代の最大の立法上の成果とも呼ばれる母親年金法（mothers' pension laws）が、1910年から1920年の間に、ほとんどの州で可決されることになる（Gordon 9）。この母親年金法は、賃金労働制度の侵略から母性を保護し、子育てのために女性のエネルギーを注ぐことができるように、政府がサポートするというものであり（DuBois 469）、母性主義の考え方がその背後にあった。母親年金法について佐藤千登勢は、「母子家庭の子供を施設に送るのではなく、母親が愛情ある家庭で養育し、非行や犯罪に走らないようにすることが社会秩序の安定につながるとされ、母親年金の社会的な意義が強調された」と述べている（46）。

改革者たちが、母性保護を社会的立法により実現しようとする一方で、進歩主義教育者たちは教育により家庭を安定させようとした。モンテッソーリは、彼女の著書『モンテッソーリ教育法』の中で、母親は文化的で教育的な存在として、家に住む者の模範であり、子どもたちと一緒に暮らすことが必要である（61-62）と訴え、ケイは、彼女の著書『児童の世紀』の中で、「母親たちが真剣に認識しなければならないことは、社会活動の中で教育以上に重要な仕事は無く、家庭の中での適切な影響にとって代わるることができるものは何も無いということである」と主張した（201-202）。ケイのこの表現は、ワイルダーが記事の中で、初期の家の影響にとって代わるものはないとしていることと完全に一致している（Hines 291）。したがって、ワイルダーは、モンテッソーリやケイと同じ視点から、読者に母性主義を啓蒙したと考えられる。

#### 4. 進歩主義教育運動とワイルダー

ワイルダーと進歩主義教育運動の接点には3つの可能性が考えられる。1つ目は、ワイルダーが、パナマ・太平洋万国博覧会で、直接モンテッソーリの授業を見たことである。モンテッソーリの授業を眼前で見たことは、ワイルダーに強い印象を与えたと考えられる。2つ目は、女性クラブ活動を通しての接点である。ワイルダーは、アセニアンクラブとジャスタミアクラブという2つのクラブを創設しているが、女性クラブの運営にあたっては、ミズーリ州立大学の読書コースの援助を受けている。同じく読書コースをもつランドグラウンド大学であるニューヨーク（New York）州コーネル（Cornell）大学の読書コースの会報の中には、ケイの「児童の世紀」（“century of the child”）という表現が取り上げられており、ケイの考え方を注目していたことがうかがわれる（1）。また、1910年代になると、女性クラブの設立のためのガイダンスとなる本も出版され始め、これらの書籍は、女性クラブの運営についても、詳細で実践的な説明を掲載すると共に、クラブで学習するテー

マも具体的に提案している。その中のアリス・ヘイズン・キャス (Alice Hazen Cass) によって書かれた『女性クラブのための実用的プログラム』 (*Practical Programs for Women's Clubs*, 1915) では、「教育」 (“Education”) の章で、「教育におけるモンテッソーリ・システム (a) 他の教育方法との比較 (b) それは成功か?」 (The Montessori System of Education. (a) Compare it with other methods. (b) Is it a success?) (47) のように、女性クラブでのディスカッションのトピックとして取り上げられている。また、推薦図書として、アン・E・ジョージ (Ann E. George) により翻訳された『モンテッソーリ教育法』やドロシー・F・キャンフィールド (Dorothea F. Canfield) による『モンテッソーリ マザー』 (*A Montessori Mother*) を紹介している。同様に、キャロライン・フレンチ・ベントン (Caroline French Benton) によって書かれた『女性クラブのワークとプログラム』 (*Woman's Club Work and Programs*, 1913) は、「私たちの時代の重要な運動」 (“Important Movements of Our Times”) という章で、モンテッソーリ方式 (289) について取り上げている。また、同著の「家庭」 (“Home”) の章では、ケイの『児童の世紀』を推薦図書として掲載している。つまり、女性クラブの間でも、教育への関心が高かったことがうかがわれ、ワイルダーが女性クラブ活動を通じて、モンテッソーリの著書に触れたり、彼女の教育法について議論したり、ケイの書籍を読んだりした可能性がある。3つ目の接点としては、農業新聞の発行者と編集者は、大きな都市で仕事をしていたので、20世紀初頭の様々な革新主義運動の提案者たちと接触する機会を多くもっていた。したがって、ワイルダーは、『ミズーリ・ルーラリスト』の編集長であるケースらから、進歩主義教育についても多くの情報を得ることが可能であったと考えられる。

ワイルダーの進歩主義教育者たちと一致する考え方は、後に発表される「小さな家」シリーズにも波及している。『ミズーリ・ルーラリスト』の1916年6月5日の記事の中でワイルダーは、11歳になる従兄弟のチャーリー (Charley) についてのエピソードを載せている。その内容は、父親とおじのヘンリー (Uncle Henry) が小麦の収穫のために忙しく働いている時、チャーリーは全く手伝いをしないどころか、面白がって大人たちをからかっていたので、本当にスズメバチに刺されて大変なことになっている時に、またいたずらかと思われて、すぐに助けに来てもらえなかったというものである。ワイルダーはこの記事を、良い市民を育てるためには、学校での教育、家庭での教育、母親の教育が大事であるとまとめている (Hines 187-88)。興味深いことに、ワイルダーはこのチャーリーの物語を、「小さな家」シリーズ第1巻『大きな森の小さな家』 (*Little House in the Big Woods*, 1932) で再び用いている。このことは何を意味するのか。

武田京子は、アメリカ二百年祭の記念行事について触れ、その行事が、家族の存在価値が希薄化していく中で、建国開拓から現在を振り返り、土台としての家族を思い起こさせるきっかけとなったとしている (87)。そして、「アメリカNBCは、『インガルス一家の物語』をシリーズ映画化したのが、これは、家族の意味が失われつつあることへの警告の意味を含めて制作されたものである (87)」と述べている。武田が指摘している通り、NBCはアメリカ合衆国が独立してからちょうど200年後の1974年に、テレビドラマ『大草原の小さな家』 (*Little House on the Prairie*) を製作しており、このシリーズは、1974年から1982年まで全9シーズンに渡って放送され、日本でもNHK総合で1975年から1982年にかけて放送

された。武田は、「原作の筋とは違った内容となっているが、家族への愛・人間の絆など現代の家族が手に入れにくいもの、開拓時代の家族を支えたものがテーマになっている」と続けている（87）。しかし、ワイルダーの新聞記事の内容や、その内容が書かれた時代背景が示すように、革新主義時代にはもうすでに、社会学者、進歩主義教育者、改革者、及びジャーナリストなどの多くが、かつての家庭の秩序が崩壊しつつあることに対する強い危機感を示している。したがって、NBCが家族の意味が失われつつあることへの警告としてテレビドラマを製作したのと同じ理由で、それよりも40年以上前に、ワイルダーは、同ドラマの原作である「小さな家」シリーズの中に、彼女の家に対する願いを表現したのではないかと考えられる。

ワイルダーの「小さな家」シリーズは全巻に渡り、農民であるインガルス一家及びワイルダー一家の、温かな最良ともいえる家庭生活と、その中で子どもたちが役に立つ市民となるよう育っていく姿が描かれている。バージニア・L・ウルフ（Virginia L. Wolf）は、ワイルダーの描く小さな家は、主人公ローラに、心情的安全と身体的安全、そして愛を大草原の真ん中で提供し、自然や外的影響に圧倒された時の、避難所であり安心の拠り所となっているとしている（120）。そして、父チャールズ（Charles Ingalls, 1836-1902）と母キャロライン（Caroline Ingalls, 1839-1924）は、「子どもたちに、家庭の中及びコミュニティの中でどう生きるかの模範を示している」と述べている（120）。

ミンツは、西部開拓時代について、大草原の開拓者家族の物語は、貧困、絶え間ない苦勞、そして絶え間ない努力の物語だが、その過程で、パイオニアが利用できた最も強力な資源は家族だったとしている。大草原での生活は過酷で、単調で、残酷に長い労働時間、干ばつの脅威、借金の重荷を特徴とするが、この逆境において生き残るために、すべてのメンバーが協力することが求められたことにより、家族の結束を強化したとしている（98-99）。そして、家族に対する強い思考は、農村生活の決定的な特徴であったことから、革新主義時代の家族の擁護者は、ヴィクトリア朝の価値観の再主張をすることで、伝統的な価値観の尊重を取り戻そうとしたとしている（113）。ウルフ及びミンツの主張から、ワイルダーは、大草原で暮らすインガルス一家を描くことにより、読者である子どもたちに対しては、厳しい環境の中で、お互いに助け合いながら、温かい家庭を築いた西部開拓時代の農民の日々の生活を代理体験することを願い、一方、子どもたちと一緒に同シリーズを読む親たちには、進歩主義教育運動で重要視される家庭教育及び母親の役割の大切さを、物語を通して訴えたかったのではないかと考えられる。

## 5. おわりに

これまで、ワイルダーの農業新聞『ミズーリ・ルーラリスト』の家庭教育と母性に関する記事を時代背景と共に分析することを通して、ワイルダーと進歩主義教育運動について探ってきた。ワイルダーは、アルマンゾ・ワイルダー（Almanzo Wilder, 1857-1949）と結婚する以前は、小学校の教師をしていたことから、教育に対する関心は高かったものと考えられる。そのことを裏打ちするように、『ミズーリ・ルーラリスト』に、当時の子どもたちが利己主義に走りがちであること、子どもの犯罪が増加していること、自殺する子ど

もが現れていることを取り上げ、子どもたちの状況を懸念する内容の記事を書いている。ワイルダーは、当時の社会学者、進歩主義教育者、改革者、及びジャーナリストたちと同様に、これらの現象は、家庭教育の力が弱まったことに起因していると考えた。

家族の希薄化は、すでに、革新主義時代から始まり、今日に至るまで続いている。1917年7月20日の記事でワイルダーは、「太陽の下には新しいものはない」ということわざがあるが、その意味は、人生の真実とか人生の法則は、どんなに文明が発達しようとも変わらないということだとしているが (Hines 278-79)、家庭の重要性は時代が変わろうとも変わることはない。ワイルダーの書いた自伝的小説は、大草原が舞台であることから、「大草原」シリーズと呼ばれてもよいのだが、ワイルダー自身は、自らの作品を「小さな家」シリーズと呼んでいる。このことは、作品のテーマが「家」にあることを明確に表している。ワイルダーは「小さな家」シリーズ第3巻『大草原の小さな家』 (*Little House on the Prairie*, 1935) の「大草原をあとに」 (“Going Out”) という章で、インガルス一家がカンザス大草原に建てた家を離れる時の様子を描いている。「住みごこちのいい丸太の家は、いつもとちっともかわらない顔をしていました。みんなが行ってしまうことを、まるで知らないようです」 (恩地三保子訳 388)、「小さな丸太の家と小さな家畜小屋は、その静けさのなかに、さびしそうにうずくまっていました」 (恩地三保子訳 389) と表現しており、擬人法が用いられている。モンテッソーリは、家は生き物であり、魂をもっているとしているが (68)、彼女の言葉通り、1年間インガルス一家と苦楽を共にした家は、もはや単なる壁ではなく、魂をもつ存在へと変容したことを表していると考えられる。つまり、ワイルダーの描く「小さな家」は、モンテッソーリの言葉を借りれば、「家族の神聖なシンボル」 (“the sacred symbol of the family”) (68) を表象していると考えられる。また、ワイルダーは『ミズーリ・ルーラリスト』の記事の中で、小さなことについて「本当に素晴らしい小さなこと (little things) が沢山ある」 (Hines 289) と述べているが、家には、決して軽んじることのできないかけがえのない沢山の「小さな」ことが詰まっていることから、「小さな家」の「小さな」には、家の中の「本当に素晴らしい小さなこと」という意味も込めて、自らの作品を「小さな家」シリーズと呼んだのではないだろうか。

以上のことから、本小論は、彼女の書いた『ミズーリ・ルーラリスト』の記事、当時の時代背景、彼女の作品の分析から、ワイルダーが革新主義運動の中の農村生活運動及び女性クラブ運動と共に、進歩主義教育運動からも影響を受けていたこと、そして、これらの3つの革新主義運動は、相互に関連し合いながら、ワイルダー及びワイルダーの作品に影響を与えたと結論付けたい。

(たかの ひろこ・高崎経済大学非常勤講師)

## 引用文献

- Anderson, William. *Laura Ingalls Wilder: A Biography*. New York: HarperCollins, 1992.
- Benton, Caroline French. *Woman's Club Work and Programs or First Aid to Club Women*. Boston: Dana Estes & Company, 1913.
- Byington, Margaret F. "The Normal Family." *The Annals of the American Academy of Political and Social Care Treatment*, 1918, pp. 13-27.
- Cass, Alice Hazen. *Practical Programs for Women's Club*. Boston: Dana Estes & Company, 1913.
- Clifford, Daniel. "The Life and Legacy of Maria Montessori." 23 November 2021 <<https://www.springmontessori.com/wp-content/uploads/2016/02/The-Life-and-Legacy-of-Maria-Montessori.pdf>>.
- Cornell Reading-Course for Farmers' Wives*. No. 8. Ithaca, New York: Cornell University, 1910.
- Dewey, Evelyn. *New Schools for Old: The Regeneration of the Porter School*. New York: E. P. Dutton & Company, 1919.
- Dewey, John. *The School and Society*. Chicago: The University of Chicago Press, 1915.
- DuBois, Ellen Carol, and Lynn Dumenil. *Through Women's Eyes: An American History with Documents*. Boston: Bedford/ St. Martin's, 2012.
- Ellwood, Charles A. *Sociology and Modern Social Problems*. New York: American Book Company, 1910.
- Fraser, Caroline. *Prairie Fires: The American Dreams of Laura Ingalls Wilder*. Pierre: South Dakota Historical Society Press, 2017.
- Gordon, Linda. "Putting Children First: Women, Maternalism, and Welfare in the Twentieth Century." University of Wisconsin-Madison: Institute for Research on Poverty Discussion Paper no. 991-93, 1993.
- Hines, Stephen W. *Laura Ingalls Wilder Farm Journalist*. University of Missouri Press, 2007.
- Key, Ellen. *The Century of the Child*. New York: G. P. Putnam's Sons, 1909.
- . *The Renaissance of Motherhood*. New York: G. P. Putnam's Sons, 1914.
- Miller, John. E. *Becoming Laura Ingalls Wilder: The Woman behind the Legend*. Columbia: University of Missouri Press, 1998.
- Mintz, Steven, and Susan Kellogg. *Domestic Revolutions: A Social History of American Family Life*. New York: The Free Press, 1988.
- Montessori, Maria. *The Discovery of the Child*. Adyar, India: Kalakshetra Publications, 1966.
- . *The Montessori Method*. New York: Frederick A. Stokes Company, 1912.
- Romines, Ann. *Constructing the Little House: Gender, Culture, and Laura Ingalls Wilder*. Amherst: University of Massachusetts Press, 1997.
- Staring, Jeroen, and Jerry Aldridge. "Out of the Shadows: Redeeming the Contributions of Evelyn Dewey to Education and Social Justice (1909-1919)." *Case Studies Journal*, vol. 3, Issue 11, 2014.
- Wilder, Laura Ingalls. *Little House in the Big Woods*. 1932. New York: HarperCollins, 2004.
- . *Little House on the Prairie*. 1935. New York: HarperCollins, 2004.
- Wolf, Virginia L. *Little House on the Prairie: A Reader's Companion*. New York: Twayne Publishers, 1996.
- 有賀貞「アメリカ革新主義論」『国際基督教大学学報 IIB 社会ジャーナル』第6号, 1965, pp. 187-211.
- 乙訓稔「マリア・モンテッソーリの教育思想—その子ども観と教育の目的論と方法論を中心として—」『実践女子大学 生活科学部紀要』第45号, 2008, pp. 41-52.
- 佐藤千登勢「母親年金から児童扶助へ—1935年アメリカ社会保障法とジェンダーに関する一考察—」『ジェンダー史学』第3巻, 2007, pp. 45-46.
- 武田京子「作品研究：インガルス一家の物語」『岩手大学教育学部附属教育工学センター教育工学研究』第11号, 1989, pp. 79-88.
- 竹田有「郊外化とアメリカ中産階級」『アメリカ研究』第28号, 1994, pp. 35-51.
- 田中正浩「マリア・モンテッソーリの子ども観—[生命助成の教育]の形成基盤として—」『駒沢女子短期大学研究紀要』第45号, 2012, pp. 21-29.
- 高野弘子「革新主義時代のローラ・インガルス・ワイルダー」長野県立大学『グローバルマネジメント』第5巻, 2021, pp. 1-18
- 保田恵莉「幼児教育の追求とモンテッソーリ教育」『花園大学社会福祉学部研究紀要』第22号, 2014, pp. 49-57.
- ローラ・インガルス・ワイルダー『大草原の小さな家』恩地三保子訳 東京：福音館書店, 2013.

## Laura Ingalls Wilder and the Progressive Education Movement

TAKANO Hiroko

### Summary

Laura Ingalls Wilder worked on a farm with her husband during the progressive era. She also wrote articles for the farmers' paper, *Missouri Ruralist*, about the Country Life Movement and the Woman's Club Movement, as well as pieces on education.

A careful analysis of her articles about education reveals that her ideas reflected those of Maria Montessori, Ellen Key, and John Dewey, the leaders of the Progressive Education Movement. One of their main preoccupations was with the importance of home and motherhood. In her articles, Wilder worried about the tendency of children to become more selfish, and the increase in both children's crimes, and the child suicide. Along with sociologists, educators, and many others, Wilder thought these problems were caused by an underlying crisis in the American family. It was thought that the role of the family had become weakened and that this was causing social problems. Wilder, too, wanted the readers of her articles to be more aware of the importance of home and motherhood, and the ideas of the Progressive Education Movement later influenced the *Little House* books. Wilder's novels offered her child-readers the vicarious experience of a warm-hearted farm family and emphasized to parents the importance of home education and motherhood.

Montessori states that the house is "the sacred symbol of the family." Wilder called her books "Little House" books instead of "Great Plains" books because, like the leaders of the Progressive Education Movement, she wanted her readers to understand the importance of home.